常陸大宮市史編さんだより　Vol.21

常陸大宮市の城跡調査①
－向ノ入館跡－

古代・中世史部会では現在、市内の城跡を調査しています。城跡と言っても、探しているのは、石垣や天守閣を備えた江戸時代の城の跡ではなく、空堀と土塁により守られる土づくりの城の痕跡です。出城やのろし台のような簡素なものも含めると、市内には60か所以上もの城跡が残ります。近年では、民間の研究者により多くの城跡が新たに発見され、また、高部城跡や河内城跡（ともに美和地域）等の一部の城跡では、市民団体による調査・整備事業も進められています。これらの成果は、今後の市史編さん事業で取り上げていきたいと思います。

ところで、城跡の調査では、地面の凹凸を観察して縄張図という図面を作り、研究や遺構の保存に役立てます。今回は、城郭研究者の五十嵐雄大さんが去年発見した、向ノ入館跡について、私が描いた縄張図を基に紹介します（図１）。

向ノ入館跡は、大字北塩子地内、常陸大宮市文書館の南東の山上に所在します。山頂の曲輪（防御された平場）を中心に、土塁や堀切などの防御施設が城を守ります。

この城の注目すべき点は、城内を古道が通っている点です（図１内破線部）。

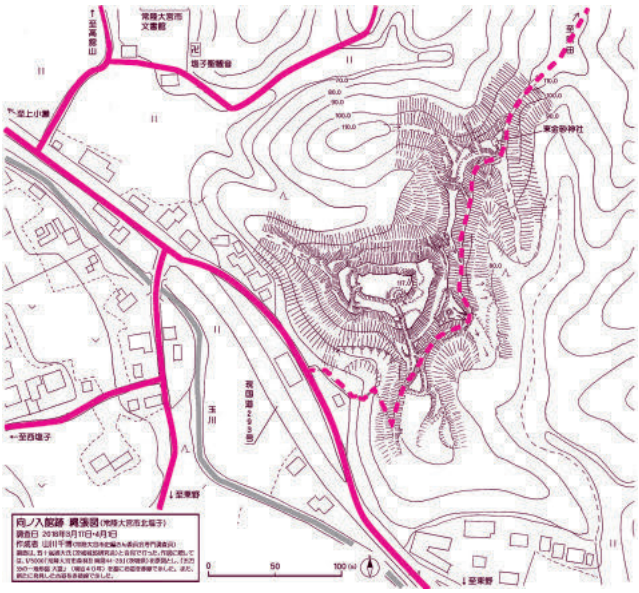


図１　向ノ入館跡の縄張図

古代・中世史部会専門調査員　山川　千博
（大田原市教育委員会　文化振興課　市史編さん係）

この古道は、西塩子方面から東進してくる道の延長線上にあたり、城内を通り、東金砂神社の分霊を祀る社を経由して北東の照田方面へと抜ける、「照田街道」と呼ばれる道（圷夏男『塩子観音縁起』1986年）の一部だと思われます。

この古道の発見により、同一の道筋上に西塩子館跡・上小屋館跡・向ノ入館跡・羽黒山館跡等の多くの城跡が並ぶことがわかり（図２）、今まで注目されていなかった東西の道が、実は重要な道である可能性が浮上しました。とくに上小屋館跡と向ノ入館跡との間は、照田街道と、東野方面から上小瀬・高舘山方面へと抜ける南北道（概ね現国道293号）との交差点にあたるため、向ノ入館跡の交通上の重要性がうかがわれます。

今後も市史編さんを通じて、市内の知られざる城跡を少しずつ紹介したいと思います。もし皆さんがお住まいの地域に、未発見のお城に関する情報があれば、ぜひご一報ください。

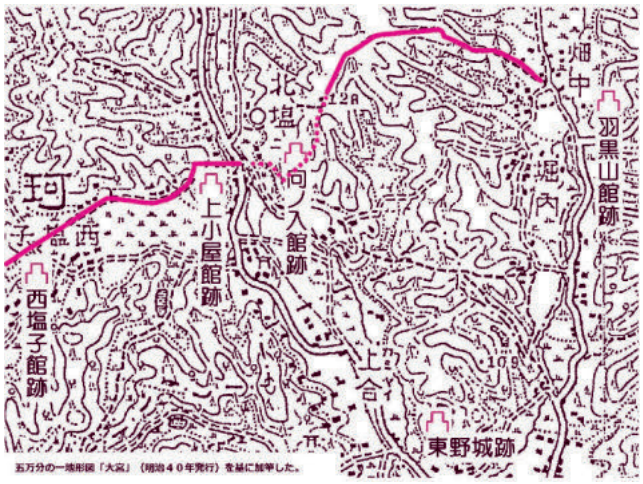


図２　照田街道と沿道の城跡

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52 - 1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.22

水戸藩の御林を管理した村人たち

近世史部会専門調査員　坂本　達彦
（國學院大學栃木短期大学　日本文化学科教授）

私は近世（江戸時代）史を専門としており、取り組んでいるテーマの１つとして、領主による林野行政があります。

日本は森林資源が非常に豊富な国で、常陸大宮市についても、総面積34,838haのうち森林面積は21,691ha（森林率は62.1％）となっています。そのうち2,547haが国有林です（平成29年度「茨城の国有林」茨城森林管理署発行）。

江戸時代には幕府や藩が直轄する御林があり、それが現代の国有林にも引き継がれています。

常陸大宮市域は水戸藩領でしたので、市域には藩の御林が存在しました。水戸藩の藩有林は「御立山」といわれ、藩の利用目的により管理方法も異なりました。最も多いのが用材目的で、その管理事務は郡奉行所の役人が担当します。そして、現場で直接管理にあたったのは山横目（または大山守）―山仕立掛（庄屋格）―山世話役（組頭格）―小山守（または山守）らの村吏です。山横目は数村から十数村を一区域として任命され、有力な庄屋が兼帯することが多く、主な仕事は植林、山林の見廻り、下草刈り、立山の木の伐出に立ち会うなどで、その実施は小山守をはじめ配下の村役人を指揮して行っていました（『水戸市史』中巻１）。

▲乍恐以書付奉願上候事
（長山春代家文書141，常陸大宮市文書館蔵）

このように江戸時代の林野行政は、村人にも任されていたため、藩有林の行政を調べるには、藩の役所に残された史料のみではなく、山横目などを務めた村役人の家に残されたものも調査・研究しなくてはなりません。

過日は、常陸大宮市文書館で保管されている若林・永山春代家文書を閲覧・撮影してきました。写真は文政９（1826）年のもので、小山守七兵衛は妻と死別し、家には老母と子供がいることを理由に退役を願っています（同家文書141）。家庭の事情で小山守職の辞職を願っています。このような記録も村役人の家に残されているのです。

今後は当館や茨城県立歴史館に所蔵されている史料とともに、未調査の古文書も調査し、新たな事実を発見していきたいと思っています。

市民の皆様には、情報提供などご協力を賜ると思います。よろしくお願いします。

お知らせ

市史編さんだよりVol.19（広報３月号掲載）で案内した『常陸大宮市史研究』第１号は現在、歴史民俗資料館大宮館と文書館で販売中です（500円）。ご希望の方はぜひ足を運んでみてください。

※市史研究は完売後、インターネット上での公開を検討しています。

■問い合わせ■

文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52 - 1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.23

車が普及する以前の移動・輸送手段とは？

近現代史部会協力員　棚井　　仁
（東京大学大学院）

自動車が普及する以前、人々はどのように移動し、どのようにモノを運んでいたのでしょうか？

戦前期（1920年代以降）には、オートバイ・自動車が登場しますが、一般の家庭にまでは普及せず、自転車が普及しました。自転車は、移動手段にとどまらず、後方に台車を付け、リアカーとして輸送用途にも使用されました。

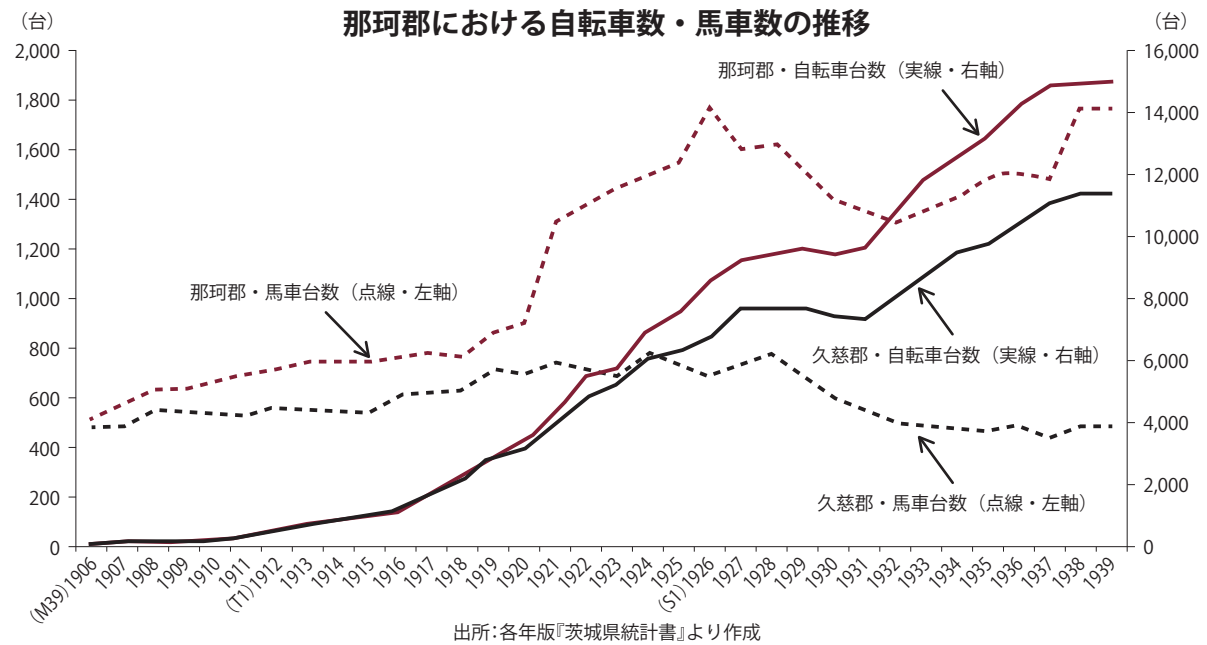
自転車は、幕末開港以降、主にアメリカ・イギリスからの輸入に仰いでいましたが、1910年代には国産車が市場の半数を占め、さらに第１次世界大戦中（1914～19年）の輸入途絶を機に、国内需要のほとんどをカバーしました（自転車産業振興協会『自転車の一世紀―日本自転車産業史―』ラテイス、1973年）。

那珂郡（現在の常陸大宮市の大部分が含まれます）でも、自転車産業の発展と符節を合わせて、その数が増加しています。これは隣接する久慈郡でも同じです。

さらに、点線で示したのは「馬車（荷車）」の数です。こちらは、久慈郡で横ばいなのに対し、那珂郡では自転車と同様、1910～20年代に増加しています。

那珂郡では、自転車の普及と同時に、馬車もまた輸送手段として重要な位置を占めていたと考えられます。その背景に、農工業生産との関係、農業経営（畜力の利用）との関係、鉄道との関係（駅の有無）、山林面積の多寡や地形など、様々な要因が推測されますが、この統計資料からわかるのはここまでです。

近現代史部会では、編さんの指針として、「地域に生きた人々の経験にもとづく“顔の見える歴史”を」ということが、話題に上ります。しかし、地域の人々の日常を知ることができる史料は、決して多くありません。そのため、新しい史料を発掘したり、経験者・当事者の方に直接お話を伺う必要があります。この点で、市民の皆様のお力添えなくしては“顔の見える歴史”を書くことは不可能と言えます。史料の閲覧や体験談の聞き取りなど、ぜひご協力頂けますようお願い申し上げます。



出所：各年版『茨城県統計書』より作成

■問い合わせ■　文化スポーツ課　文化・スポーツグループ　☎52 - 1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.24

夏のお祭り－祇園祭（ぎおんさい）・天王様（てんのうさま）－

民俗部会専門調査員　林　　圭史
（茨城県立歴史館　副主任学芸員）

祇園ってなに？

「夏のお祭り」と聞いて、皆さんが思い浮かべるのはどんな祭りでしょうか。巨大な山鉾が街を巡行する京都の祇園祭は全国的に有名ですが、常陸大宮市域でも大宮、下小瀬、小倉、小田野、鷲子等で祇園のお祭りが現在も行われていて、御神輿の巡行をはじめ、地域の方々が大切に守り継いできた山車（だし）やお囃子もまた、夏のお祭りの雰囲気をより盛り上げています。

▲鷲子山上神社の祇園祭（山車巡行）

祇園祭は、今日、八坂神社のお祭りとして行われることが多いですが、八坂神社は、明治時代以前は「祇園社」と呼ばれ、それが祭りの名称の由来になっています。また、祇園社の守護神は「牛頭天王（ごずてんのう）」という神でした。現在でも、祇園祭のことを「天王様（てんのうさま）」と呼ぶこともあります。

ところで、茨城県南地域、特に霞ヶ浦周辺地域祭では、御神輿を霞ヶ浦まで担ぎ運んで洗い清め、これを「浜降（はまお）り」と呼んでいます。このように、ひとくちに祇園祭といっても、それぞれに地域ごとの特色（地域性）があります。

近いようで遠い？“ほんのちょっと昔”のくらし

市史の調査の中で、「こんな面白いお祭りは、ここの集落でしか見られない」や、「うちのお囃子はひと味ちがうよ」というような、地元に対する皆さんの熱い思いや、地域の伝統を受け継いできたことへの誇りを垣間見る瞬間は、調査をしている私も心が躍ります。常陸大宮市で暮らしてきた皆さんの日常生活の移りかわりを記録に残すのが、民俗部会の役割のひとつと考えています。

▲小田野地区の天王様（神事）

ここで質問です。地域のお祭りの余興で、カラオケが始まったのは何年前のことでしたか？このように、ずっと昔ではなく、ほんのちょっと昔のこと、しかも、より身近なことほど、正確に思い出したり、次の世代の人たちに伝えたりするのが意外と難しいものなのかもしれません。市の歴史を振り返るうえで欠かせない、郷土の人たちの足跡を、私も民俗部会の一員として一緒に記録に残していきたいと思います。

探しています！

古文書・古写真・古い石塔・昔話・珍しい動植物などは、本市の歴史を調査する重要な手がかりです。

お心当たりがありましたら、ぜひご一報ください。

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52 - 1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.25

常陸大宮市の魚たち

私たちの住んでいる常陸大宮市には、栃木県の那須を水源とする那珂川と、福島県の八溝山や阿武隈高地を水源とする久慈川の大きな川が流れています。また、両河川には、支流となる小さな河川が数多くみられます。

今回の市史の自然編の調査では、常陸大宮市内にどのような魚が何種類生息しているのか、そして茨城県全体からみて、どんな特徴をもっているのかを調べています。また、減少している絶滅危惧種や、魚と人との関わり（漁労や方言）についても調べています。

1996年から継続している調査では、那珂川水系からは約150種類、久慈川水系からは約100種類の魚を確認していますが、これは、川の源流部に生息するサケ科の魚から、下流や河口部に姿をあらわすハゼ科やスズキ、ボラなど海魚を含めた数です。

このうち、常陸大宮市内を流れる那珂川や久慈川の本流とその支流からは、50種類以上の魚類を確認しています。現在までに分かっている特徴として、支流の沢にはヤマメやカジカが生息していることや、中流の流れである那珂川や久慈川の本流とその支流の緒川や玉川、枇杷川や久隆川などの支流には、アユやウグイ、カマツカ、ヒガシシマドジョウなどの清流に多い種類の魚が生息していることがわかりました。

▲久慈川水系のアユ

自然部会専門調査員　稲葉　修
（飯館村教育委員会、
福島県希少野生動植物保護アドバイザー）

また、かつては普通にみられたホトケドジョウやギバチ（地方名･ギギ、ギンギョ）、シマヨシノボリ（地方名・ヨメサマカジカ）など、茨城県内として減少している魚種もみられました。

一方、最近では、外来のオオクチバスやコクチバスなどのブラックバス類が増加しており、これは社会的にも大きな問題となっています。

今後、常陸大宮市の魚類調査を継続していく上で、地域の人々からたくさんのことを教えていただき、漁業組合の皆様のご協力をいただきながら、市内の川と魚を通した常陸大宮市の環境と未来、地域づくりについて考え、地域の皆様にご提案やご相談ができるようにしていきたく思います。川で調査する姿を見かけましたら、ぜひお声がけください。

探しています！

古文書・古写真・古い石塔・昔話・珍しい動植物などは、本市の歴史を調査する重要な手がかりです。

お心当たりがありましたら、ぜひご一報ください。

■問い合わせ■

文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52 - 1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.26

中世の城、城下町、黄金伝説

考古部会専門調査員　宇留野　主税
（桜川市教育委員会 生涯学習課副主査）

自己紹介

私の専門は、中世の城と都市の考古学です。

現在は筑波山麓の桜川市に勤め、国指定史跡・真壁城跡の発掘と復元整備を担当しています。小野地区出身（旧大宮町・昭和48年生）ですので、故郷に恩返しができるよう頑張ります。

中世遺跡は400年～800年も前のものですが、日常の風景の中に意外と残っています。考古資料や歴史の風景の魅力を、市民のみなさんと発見し、体験をともにしながら、未来に伝えたいと思います。

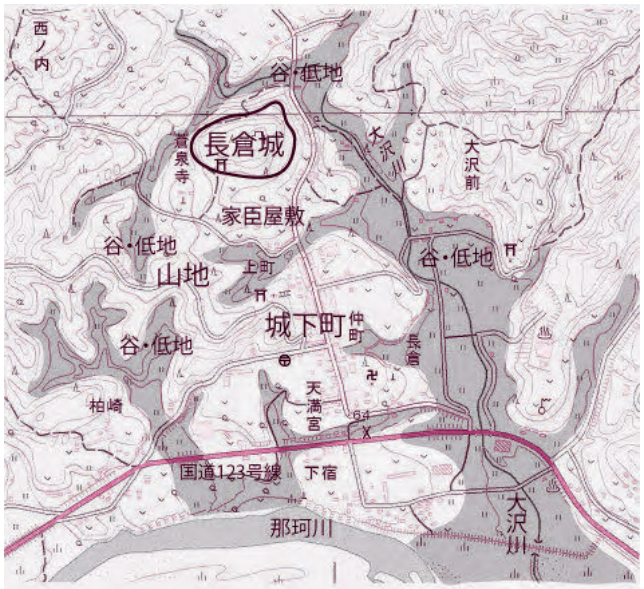
では、現在の調査を少し紹介しましょう。

城と城下町の調査　ー中世のまちづくりー

中世の城は、曲輪（くるわ）という兵隊の駐屯地のなかに、櫓、門、塀、兵舎等を建てた軍事施設です。外周は土塁（どるい・大きな土手）、堀（ほり・大溝）、切岸（きりぎし・ガケ）等を作って守りました。

調査では、城の形とともに、自然地形や城下町も観察して、まちづくりの全体像を調べています。

例として、長倉城跡（御前山地区・長倉）をみてみましょう。長倉城は鎌倉時代の文保元年（1317）築城を伝え、戦いを多く経験した「歴戦の山城」です。



▲長倉城と城下町、高低差の大きい自然地形（灰色）

「御本城山」と呼ばれる城跡は、長倉地内北部山地の一角にあり、「長倉宿」は中世城下町が起源です（『館と宿の中世』常陸大宮市2009年刊行）。

左図は長倉城と城下町を囲む自然地形。北・西は山と谷、南は那珂川、東は谷と大沢川と低地です。図１の灰色部分は、城の堀や切岸のような役目を果たす地形です。長倉城と城下町は、この地形を利用して、広い範囲を一体的に守り、敵を防いでいます。

中世の城を中心とするまちづくりは、城と「城のような自然地形」を組み合わせて安全を保障し、城下町の発展につなげました。中世のまちづくりの知恵について、市内各地から学びたいと思います。

黄金伝説！？　ー金地名と伝承地ー

常陸大宮市は、金をとったという伝承が各地にあります。特に久慈川や玉川沿いは「金堀」等の地名や金採掘伝承が多いようです。

これらの伝承地は、①砂金をとった場所、②金鉱石を掘る金山（山方地区･久隆地内）、③金鉱石を集める拠点（美和地区・上檜沢地内）などです。今後は、産金や地域交流の実態などを調査します。

■問い合わせ■

文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52 - 1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.27

中世の石造物調査　－新たな発見－

古代・中世史部会協力員　比毛　君男　氏
（土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場　学芸員）

中世史部会では、市内に残る中世（鎌倉･室町時代）の様々な石造物を調査しています。既に所在が明らかで地域の歴史上重要な中世の石造物としては、山方地区の常安寺五輪塔、野口地区の板碑、高部地区の高部景義墓の３点が常陸大宮市指定文化財になっています。中世の石造物は、五輪塔･宝篋印塔などの石塔と、板石に供養の願文を刻んだ板碑が多数を占めています。地域によっては仏像彫刻や他の形状の塔も見られますが、生前または没後供養塔としての五輪塔・宝篋印塔、板碑が関東地方の石造物の主流であると言えます。

今回の市史編さん事業に伴う石造物調査は、指定文化財以外に地域に眠る中世石造物を掘り起し、地域の歴史の中でどのような意義や文化的価値があるのか探ることを目的にしています。現在は調査の途中ですが、今までの通説を覆す新しい発見があります。

実は今までの市町村史の中で、茨城県の中で県央部から県北部にかけては、中世の石造資料は報告例が乏しく、存在そのものも少ないと想定されていました。これに対して県南部は筑波山塊を中心に花崗岩などの産地であり、また、県西部は利根川等の内水運流通を利用して、埼玉秩父産の緑泥片岩等を入手しやすい環境にあるため、年号や文言を刻む中世の石造物が一定量報告されています。

今、市史編さん事業に伴い、多くの調査員が市内各地を踏査しています。その過程で、実は常陸大宮市内には、中世の石造物が多数残されていることが分かったのです。

右の写真は、市内氷之沢地区の個人墓地に残る宝篋印塔ですが、昭和50年代まで２基がセットとして旧道沿いに立っていたことが分かりました。

年号などは刻まれていませんが、様式的にこの石塔は15世紀頃のものと推定されます。この他にも市内の様々な地点で、今まで報告のなかった中世の石造物が続々と発見されています。実物を拝見する限り、五輪塔よりも宝篋印塔の方が多く、五輪塔が多い県南部とは対照的な在り方が県北部では推定されるところです。

▲宝篋印塔（氷之沢地区）

私は、現在中世石造物の調査協力員として、発見された石塔を図や写真で記録する作業を行っています。どうか市民の皆さんも、市内に古そうな石塔がありましたら情報をいただけると幸いです。よろしくお願いいたします。

■問い合わせ■

文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52 - 1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.28

村人の印と実名

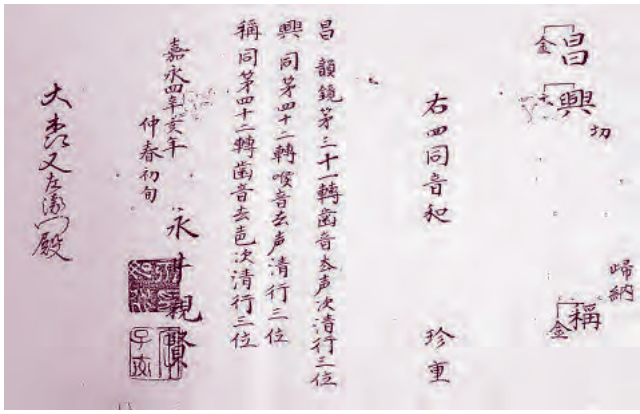
近世史部会専門調査員　千葉　真由美　氏
（茨城大学教育学部准教授）

専門は近世史、江戸時代の村と人をテーマに研究をしています。

市史編さんで担当するテーマの一つは、村政やその担い手である村役人についてです。庄屋や組頭などの村役人は、村ではとても強い権力を持っているというイメージがあるかもしれません。そういった側面は間違いではありませんが、例えば領主への年貢収納では、村の代表者としての責任を果たす必要があり、一方で村人たちには、安定した生活ができるような指導や教育をする必要がありました。村の内外で頻発する争いを仲裁する立場でもあります。

また、日常的に多くの帳簿や証文を作成する事務があり、村役人は多忙を極めていたと考えられます。村政や村役人に関わる基礎史料として、領主の触れなどを村役人が書き留めた「御用留（ごようどめ）」がありますが、現在、近世史部会のメンバー全員で、上伊勢畑村の「御用留」の翻刻作業を進めているところです。

私は百姓が使用する印の研究を続けてきたため、印を使用する個人としての村人のあり方にも注目しています。村人たちが日常的に印を使用するようになったのは、江戸時代からです。そして江戸時代中期以降、印に彫る文字は、印を使用する本人の「実名」となっていく傾向にあるようです。実名はしかるべき知識人から授けられるようですが、市域では、嘉永４年（1851）に高部村の大森家４代又左衛門が、「昌興」の実名を授けられた時の史料があります。



▲嘉永４年「応求考之」（大森家文書790）部分

また、姓名ということでいえば、水戸藩領の村々には、村人の苗字を申告させた「姓名帳」「姓名控帳」などの史料が残されています。公的には名乗ることがほとんどなかった百姓の苗字を、藩が調べたことも大変興味深いものです。百姓の家の由緒意識にもつながり、家と人のあり方にも着目できると考えます。

そして女性、子供、高齢者の問題も重要です。これらのテーマは過去のことではなく、現在の社会問題にもつながります。近世の人々が、社会の中で力強く生きていく姿、教科書にはあまり載ることのない側面も紹介できればと思っています。

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52 - 1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.29

「幻の首相」・山崎猛のルーツ

▲山崎猛肖像（個人蔵）

茨城県出身で最も首相に近づいた人物をご存知でしょうか？

昭和23年（1948）10月、第二次吉田茂（民自党総裁）内閣の誕生を嫌うGHQの一派が、吉田の代わりに後継首相に担ぎ出そうとした、民自党幹事長の山崎猛（水戸市出身）です。しかし、山崎は「総裁を差しおいて幹事長が首相になるなど、憲政の常道に反する」として、首班指名の直前に議員辞職願を提出し、「山崎首相」の誕生は「幻」に終わりました。当時、「山崎のハラキリ」などと報じられた同事件は、一般には「幻の首班指名」と呼ばれています。

その山崎猛のルーツは、実は常陸大宮市の下村田と長倉にあります。戦国時代の末期、佐竹義宣に仕えていた山崎家の祖・政直は、義宣の秋田移封に病気で従えず、下村田に住んだとされています。

また、その子政済は、水戸徳川家の一族である長倉松平家の始祖松平頼泰（初代水戸藩主徳川頼房の八男）に仕え、以後、山崎家は代々長倉松平家の重臣を務めました。特に、猛の祖父山崎幾之進（政徳）は、幕末期に頼位、頼譲、頼功、頼遵の４代にわたって長倉松平家を支え、その勇猛さ、峻厳さから「鬼山崎」と畏怖されたといいます（「山崎幾之進事蹟」『昭和大礼贈位書類第七冊（内ノ七）』国立公文書館所蔵）。

幾之進は、天狗党の乱で非業の死を遂げた宍戸藩主松平頼徳に関して（恐らく助命に）奔走したことから水戸藩の門閥派政権によって捕縛され、慶応２年（1866）９月に水戸の赤沼獄で獄死しました（「否塞録」〈茨城県立歴史館叢書16、2013年、111、114ページ〉）。

山崎猛は、その後、家名再興を許された幾之進の次男政愛の四男として明治19年（1886）に水戸で生まれ、長じて東京、そして朝鮮・満州へと出て行きます。

近現代史部会専門調査員　**石井　裕　氏**
（茨城県立歴史館主任研究員）

大正９年（1920）の帰国後は立憲政友会系の政治家として名を成し、最後は首班指名の寸前まで権力の座を登りつめました。現在、茨城県立歴史館で整理中の「山崎猛関係資料」（仮）には、いつの頃か、山崎が収集した下村田などの近世史料（山崎家関係）が含まれており、山崎が自身のルーツである常陸大宮市域に何らかの関心を抱いていたことがわかります。

「顔の見える近現代史」の編さんが、私たち近現代史部会のテーマの一つです。常陸大宮市にゆかりのある様々な人びとのライフヒストリーを交差させながら、「顔の見える近現代史」の編さんを実現したいと考えています。

そのためには、市民の皆さんのご協力が必要です。どうぞよろしくお願いします。

▲山崎幾之進墓碑（水戸市・高台寺）

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52 - 1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.30

公民館調査が始まりました

私たち民俗部会は、市民の皆さんの所に直接出かけて行って、たくさんの祭礼や行事を見せていただいたり、昔からの生活の様子に関するお話を聞かせていただいています。

夏の祇園祭や秋の例祭・新嘗祭、お正月のオカザリ(マユダマ)作りやワーホイの行事など印象に残る行事を間近で拝見させていただきました。なかでも、七月に行われた北野・五所神社（常陸大宮市小倉地区）の祇園祭は迫力のあるものでした。ベテランと若者が協力して、神輿を山上の神社から人々の住む平坦な里に降ろす様子には感激しました。指揮をした青年長が、急峻な階段を降ろし終えた瞬間に見せた安堵と達成感に満ちた表情は忘れられません。

また、今年７月に開催予定の鷲子の夏祭り（祇園祭）については、昨年の準備会議から取材させていただいています。現代は日本中の多くの地域で、伝統行事の存続に課題を抱える時代ですが、ここでの準備会議には若い方が多数参加され、伝統を守りながら円滑な行事運営をめざす改善案や山車の安全な活用法などについて、活発な議論がなされています。

▲小倉の祇園祭

小正月の「オカザリ」展示（歴史館）
民俗部会長　大津　忠男　氏
（茨城県立歴史館首席学芸員）

“長老の意見を聞きながら、実践では若者が活躍する”という集落の運営意識が実践されていて、その真剣な姿に感銘を受けます。今から、本番が楽しみです。しっかりと取材し、市史に記録を残したいと考えています。

さらに、昨年から地域の公民館での合同の聞き取り調査会（公民館調査）を実施しています。常陸大宮は自然豊かな地域ですが、それぞれの環境のなかで実際に経験されてきた生活の様子を教えていただいています。長田地区の溜池を利用した稲作や、諸沢・北富田地区の炭焼きや、コンニャクやタバコの栽培などについてのお話を直に聞くことができています。昨年は、旧山方町の二つの地区で実施させていただきましたが、これから順次他の地域でも実施する予定でおりますので、その際には是非気軽にいろいろなお話をお聞かせください。よろしくお願いいたします。

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52 - 1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.31

フユシャクについて

▲イチモジフユナミシャク
上：メス　　下：オス
（2013. 12. 28撮影：大宮自然公園）

自然部会専門調査員　佐々木　泰弘　氏
（茨城県生物多様性センター　自然環境調査員）

冬の雑木林は生き物の気配が消えて夏に比べればとても静かになってしまいます。昆虫の多くは卵や蛹の形で寒さに耐えていますし、幼虫や成虫で越冬するものも落ち葉の下や木のうろの中でじっとしています。

しかし、その冬の時期にだけ成虫が現れてくる昆虫がいます。その代表がフユシャクと呼ばれる仲間です。冬にだけ親が出てくるシャクガの仲間の総称です。シャクガとは蛾のグループでも種の多い仲間で幼虫が細長い尺取り虫の形をした小型～中型の蛾です。その中のフユシャクは日本国内で40種近くの種類が知られています。常陸大宮市内でも10種程度が確認されました。

フユシャクの特徴として、冬の時期にだけ現れるということ以外に、オスは普通に羽を持ち飛ぶことができますが、メスは羽を欠くか縮小していて飛ぶことができなくなっているということがあります。このように雌雄で大きく形状が異なることを「性的二型」といいます。

なぜ、冬にだけ現れるかといえば、天敵が少ないことが挙げられます。競争相手もいないので雑木林を独占できます。それでも、寒さに対しての備えを発達させなければなりませんでした。

メスの羽がなくなったのも、体温を奪ってしまう恐れが強い羽を縮めるという進化を経てきたのではないかと考えられます。卵を持ったまま、寒い中を飛ぶことをやめたわけです。しかし、足は発達していて、幹のうえを歩き回ることができます。

オスはメスを探さねばならず、羽をなくすことができなかったのでしょう。メスの出すフェロモンを頼りに飛び回りメスを見つけるわけです。

また、雌雄とも成虫の口部が退化し食物を一切とりません。何も食べずに１ヶ月近く生きることができます。冬には、花や樹液が無い理由もありますが、食物の水分が凍死につながるとも考えられています。

このようにとても変わった蛾の仲間ですが、フユシャクの仲間は普通種も多く、市内の雑木林でも多く見ることができます。ただし、夜行性の種が多く、昼は落ち葉の下や木々の間などに隠れていて、なかなか見つかりません。夜に雑木林に行くと、飛び交う姿を見ることができます。冬の夜空を飛ぶ虫の姿は何か異質なものを感じて素敵です。また、木の幹を注意深く観察すれば、交尾中のフユシャクを見ることができます。冬の森の中でも元気に活動している虫たちがいます。

特に常陸大宮市街地の西側にある大宮自然公園は下草刈りがよく行われており、観察しやすく、そしてフユシャクの種類も多く、良いポイントです。数年前から、同好の仲間とともに写真撮影などに訪れている場所です。

興味を持たれた方は見に行ってみてください。その際は必ず防寒対策を忘れずに、フユシャクの観察には徹底した防寒対策が必要です。昼に飛び回る種類もいますが、夜に出かけるときは、懐中電灯と安全面のため複数の人で出かけることをお勧めします。

そして、確認情報をぜひお知らせください。

※昆虫類の「はね」は、「翅」ですが常用漢字ではないため「羽」に置きかえています。

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52 - 1111（内線344）

旧石器時代の石器石材

考古部会専門調査員　橋本　勝雄　氏
（公益財団法人千葉県教育振興財団　上席文化財主事）

石器製作は、人類史上、最古のハイテクです。石器に残された情報は、当時のくらしを解明する上での良い手掛かりとなりますが、特に、石器石材は、現在、旧石器時代研究の大きなテーマのひとつとなっています。

旧石器時代の石器石材には、硬く、きめ細かく均質で素直に割れるという特性があります。市内には石材の原産地が所在し、諸沢川、久慈川、那珂川などの河原におりると、トロトロ石（デイサイト）、ガラス質黒色安山岩、メノウ、珪質頁岩などの石器の石材が簡単に拾えます。

また、河川の流域には、これらの石材の使用を物語る遺跡が数多くみられ、中でも、久慈川流域の山方遺跡（写真）と梶巾遺跡は、全国的に広く知られています。

言わば、市の特産品というべきこれらの石材は、千葉県、茨城県南部、埼玉県の一部（大宮台地）などの、身近に石器製作に適した石材が、ほとんどない地域（消費地）に大量に運び込まれ、盛んに使われていました（図１）。

このような石材研究のほかに、旧石器時代には、さまざまテーマがあり話は尽きませんが、奥が深いために今回は、ほんのさわりにとどめました。市民の皆さんには調査にご協力くださるようよろしくお願いします。

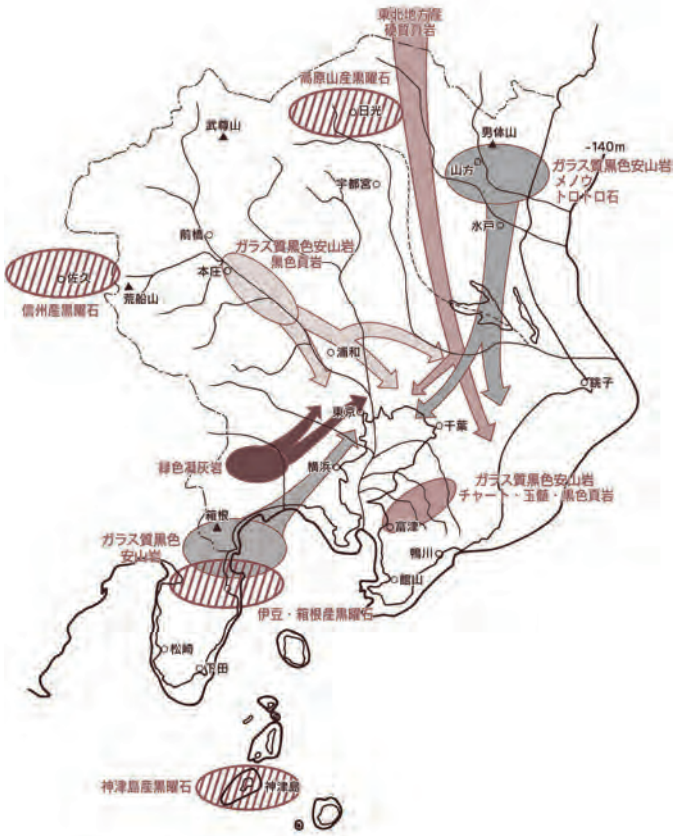


図１　関東地方の石器石材の流れ
（八街市郷土資料館提供）

山方遺跡採集の石器
（瀬尾繁喜氏寄贈）
（市歴史民俗資料館山方館所蔵、高さ 10.6㎝）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.33

古代の人口　-現代とのズレ-

古代・中世史部会専門調査員　長谷部　将司　氏
（茨城高等学校・中学校　教諭）

今から1000年以上前、古代の常陸大宮市域にはどれくらいの人が住んでいたのでしょうか。

10世紀中頃に成立した辞書『倭名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）』によれば、那珂（賀）郡は22郷、久慈郡は20郷を擁する、共に全国屈指の大規模な郡でした。その各郷の比定地には諸説ありますが、私見では那珂郡の朝妻（あさつま）・那珂・川辺（かわのべ）各郷の全域と阿波（あわ）郷の一部、久慈郷の岡田（おかた）・八部（やたべ）・真野（まの）各郷の全域と倭文（しとり）・河内（かうち）・余戸（あまりべ）郷の一部が、現在の市域に含まれると考えます。とはいえ、古代の郷（里）は50戸で構成される行政機構で、50戸を維持するために離れた村々を統合することや、一つの村を分断することもあったと考えられます。この点からも、「○○郷は△△」と厳密に当てはめるのではなく、「だいたいこのあたり」で理解するのがよいでしょう。

ただし、このような郷（里）の構成は、当時の人口を考える上ではむしろ好都合です。なぜなら、8世紀に作成された戸籍を分析すると、1郷あたりの平均人口は1,068人で、地域差も特に見られないため、ここからある程度の予測が立つのです。少々強引ですが、先述の諸郡のうち部分的な4郷は半分が市内に含まれると仮定し、全域が該当する6郷と併せて計算すると、市域内の人口は約8,500人になります。この想定は元の設定が甘めなので、実際には8,000人程度と考えるのが妥当でしょう。

▲玉川（上村田地区）

この人数を多いと捉えるか少ないと捉えるか、参考までに同じ計算をすると、現在の水戸市域の古代の人口は約10,700人となります。さらに、当時の日本全体の人口は500～600万人ですので、古代の常陸大宮市域では現在の感覚よりもはるかに多くの人々が居住し、生活を営んでいたことがわかります。なぜならば、古代の土木・治水技術では那珂川・久慈川のような大河川を管理できないため、大河川に注ぐ中小河川の周辺や、山地から流れ出た水が平地に注ぐ境目としての谷間に田地が営まれ、その近くに集落が形成されたためと考えられます。

常陸大宮市域では、特に那珂川水系の緒川と久慈川水系の玉川が農耕のための重要な河川で、先述の市域内の諸郷も多くが両河川の流域に集中しています。また、農業のみならず、緒川流域では林業、玉川流域では織物業や鉱業といった、多様な経済活動が活発に行われていたこともうかがえます。

なお、このような活動の一端は8世紀成立の『常陸国風土記』でも確認できます。そのため、今後とも引き続きこれらの史料を深く読み込み、さらに詳細な地域の実相を描き出すことができればと考えています。

■問い合わせ■

文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52-1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.34

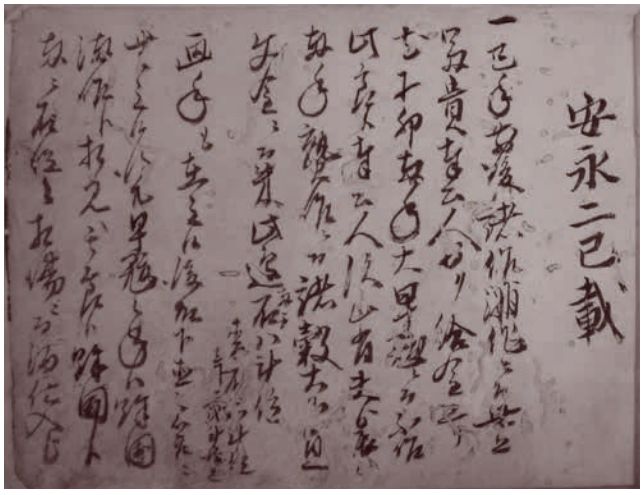
地域経済の要としての江戸時代の豪農

近世史部会専門調査員　平野　哲也　氏
（常磐大学人間科学部　教授）

常陸大宮市域には、戦国時代の土豪の由緒を誇り、江戸時代を通じて、地域社会の中で有力な地位を保った豪農がたくさん存在しました。そうした豪農は、地主・村役人・山横目・地方文人など多様な立場・性格を合わせもち、地元の産物を集荷・販売する商人・問屋としても活躍しました。野口村の関沢家は、その代表といえます。

戦国時代末まで下野国の宇都宮氏に仕えていた関沢家は、慶長6年（1601）に野口村に移り住みます。その後、18世紀前期に紙・煙草・漆を商い、18世紀半ばには酒と醤油の醸造を始めます。9代目当主の政英は、18世紀後期に経営を拡大し、「重宝記」という記録を残しました。そこには、米・大麦・小麦・大豆・小豆・紙・楮・漆・蒟蒻・紅花・木附子・綿・酒・水油・塩など、関沢家が取り扱った商品の相場と同家の諸対応が、連年、克明に記されています。

関沢家は、主力商品の紙・楮・漆を主に江戸商人に販売し、煙草は江戸はもとより大坂にまで出荷していました。米は、江戸に売る一方で、下野や岩城、時には尾張・遠江の商人から仕入れることもありました。政英は、遠隔地の市況情報を素早く入手し、目まぐるしい価格変動を正確に把握し、地域的・時間的な価格差を生かして、仕入と販売の有利な時期・相手を見極めようとしていたのです。



▲安永２年（1773）から書き継がれた「重宝記」
（関沢賢家文書 117、茨城県立歴史館寄託）

市域の特産物（紙・楮・漆・煙草・蒟蒻）に焦点を当てれば、その生産・販売が、関沢家を介して遠隔地の市場と結びつき、大きな影響を受けていたことがわかります。関沢家の背後には、特産物＝商品を栽培・加工する多数の小百姓がいました。関沢家の商業経営が小百姓の生業を成り立たせ、同時に小百姓の生産活動が関沢家の経営基盤となる相互関係が浮かび上がってきます。

私は、関沢家のような旧家の古文書を通して、豪農の政治的・経済的・社会的・文化的役割を明らかにするとともに、周囲の小百姓の生業・暮らしや地域経済のあり方を探っていきたいと考えています。古文書に書かれた内容を深く具体的に理解するためには、市民の皆さんのお話や情報提供が欠かせません。ご協力とご支援をよろしくお願いします。

▲関沢家が佐伯神社に奉納した歌碑（明治28年〔1895〕９月建立）
歌碑の下部に「那珂郡野口村　村長士族　芳賀一族　關澤長次郎　清原高治」の陰刻がある。関沢家が宇都宮氏の重臣芳賀氏（本姓は清原氏）の末裔という家意識を明治時代にも堅持していたことがわかる。

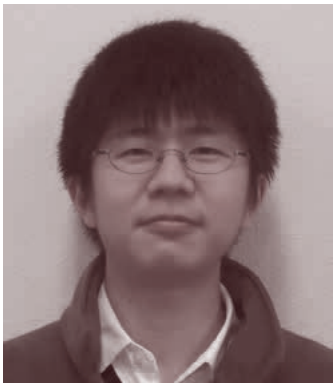
■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ　☎52-1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.35

軍隊と地域の関わり
～徴兵制を例にして～



近現代史部会協力員　有薗　舟仁　氏
（一橋大学大学院生）

皆さんは、軍隊を身近に感じられたことはあるでしょうか。

現在の常陸大宮市の範囲には、明治維新以後の近代に軍隊の基地が置かれたことはありませんが、近代の日本ではほとんど全ての人が軍隊との関わりを持つ事は避けられませんでした。そしてその関わりとして代表的なものが徴兵制です。

原則として全ての男子は20歳になった時に必ず徴兵検査を受けなければなりませんでした。この対象になる人をまとめた壮丁名簿というものが、毎年各市町村の役場で作成され、それを元に検査が行われました。

では、実際には毎年どれくらいの人が軍隊へ入っていたのでしょうか。時期や状況により大きく異なりますが、例えば大きな戦争が無い時期の大正13(1924)年に旧大宮町では、徴兵検査を受けたのは20人、このうち実際に陸軍へ入ったのは3人だったと報告されています（「自大正十三年至大正十五年　大宮町事蹟簿」（大宮町役場文書211、常陸大宮市文書館所蔵））。この数は思ったより少ないと驚かれるかもしれません。

しかし、昭和12(1937) 年に日中戦争が始まり、総力戦としての戦争が深まっていくと次第に徴兵検査を受けた者は、ほぼ軍隊へ入ることになるという状況になっていきます。

男性を軍隊に取られるとその家庭は生活に大きな影響が出ます。市町村役場では、徴兵する人員の家庭環境や経済状況まで調査しており、経済的に貧しく「生計困難ナリ」と把握している家庭からも、徴兵を実施している様子が史料から読み取れます（「現役兵身上調査表」（八里村役場文書411、常陸大宮市文書館所蔵））。

しかし、この調査は経済的な支援などに生かされたわけではなく、また徴兵を受けた家庭の生活支援も十分ではありませんでした。

常陸大宮市には、旧八里村を中心として徴兵の業務に使用された史料が残されています。人々がどのように戦争や軍隊との関わりを持ち、受け止めていたのか、史料や証言など、市民の皆さんの貴重な協力を得ながら、今後も調査を進めていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

▲「徴兵業務に関する史料（常陸大宮市文書館蔵）」

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ　☎52-1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.36

六字様（ろくじさま）

六字様　特長ある民俗行事

常陸大宮市域で8月に行われている年中行事に、六字様があります。緒川地域大岩や小舟の前屋・大貝、美和地域高部の大貝、三ツ木、東河戸、仲河戸などで伝承されてきました。

六字様の名称は「南無阿弥陀仏」、すなわち六字の名号に由来します。大岩、前屋・大貝、仲河戸などでは、六字名号を付した花飾りがつくられ、それを持って村回りをしたり、人々が参拝することが行なわれてきました。

前屋・大貝の六字様は、8月18日前後の日曜日に行われ、世話人たちが早朝から集落のセンターに集まって花飾りをつくります。世話人たちは花弁の形に切りだして縁を赤く染めた紙花を、「南無阿弥陀仏」「六字様」「病難除（よけ）」と墨書した短冊とともに、しならせた割竹に結びつけていきます。花飾りの中央の柱には「南無阿弥陀仏」と墨書された行灯（あんどん）を据えます。

かつては、完成した花飾りを担いで村回りをしましたが、近年は集落センターの庭に飾り置き、人々がお参りをします。夜には行灯に火がともり、紙花や短冊がほのかに照らされて、厳かな雰囲気となります。

民俗部会専門調査員　萩谷　良太 氏
（土浦市教育委員会）

花飾りの意味

さて、前屋・大貝の六字様では、花飾りに使用するそれとは別に、世話人たちが短冊3種と紙花をセットにして紙縒（こよ）りに通したものもつくり、各戸に配布します。各家ではこれを玄関などに飾って、厄除けとします。隣接する大字高部の大貝では、同様のものを集落の入口（境界）に立てます。仲河戸では参拝を終えた人々が花飾りから花を外して持ち帰ります。この花を棒につけて畑に挿しておくと虫がつかないそうです。

これらのことから、六字様でつくられる花飾りには、災厄をふせいで集落や家、畑などを守る護符としての意味があると考えられます。

六字様は市域の限られた地域にだけ伝承されてきた特長ある民俗行事です。この行事が成立した背景を探ることも、私たち民俗部会の課題のひとつです。

▲六字様の花飾り（前屋・大貝）

▲世話人たちによる花飾りづくり（前屋・大貝）

■問い合わせ■　文化スポーツ課　文化・スポーツグループ
☎52-1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.37

常陸大宮市の外来植物

人間の諸活動によって外国から日本に入ってきて、いつの間にか野生化する外来植物が急速に増えています。

また、農業用の緑肥作物や牧草として導入されたものや、園芸用に栽培されていたものが逸出（いっしゅつ）して野生化しているものもあります。

本市でも、これまでの筆者らの調査で約220種あまりの外来植物が確認されています。

平成17年には、これらの外来植物のうち特に生態系や自然環境などに影響を及ぼしかねない生物が、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」で特定外来生物として指定されています。この法律によって、特定外来植物は、栽培、運搬、野外に放棄することなどの行為が原則禁止されています。

本市ではオオキンケイギク、オオハンゴンソウ、アレチウリ、オオカワジシャの4種が確認されています。今回は、これらの特定外来植物のうち、オオハンゴンソウとアレチウリを紹介します。なお、オオキンケイギクは広報常陸大宮7月第178号に掲載されています。

藤田　弘道　氏
自然部会専門調査員（茨城生物の会）

オオハンゴンソウ（キク科）

北アメリカ原産の多年草です。湿った草原や河川敷などに大きな群落を作ります。高さ1～3ｍにもなります。夏から秋にかけて、枝先に直径6～10㎝の黄色い花をつけます。本市でも平成29年8月に山方地域で、今年7月に美和地域で生育が確認されました。その後、両地域とも駆除されました。今後も侵入が予想され注意が必要です。

アレチウリ（ウリ科）

北アメリカ原産で、河川敷や林の縁などに大群落を作るつる性の1年草です。何度も枝分れを繰り返して、長さ数ｍにもなります。茎には粗い毛が密生し、葉も両面が著しくざらつきます。夏から秋にかけて雄花（おばな）と雌花（めばな）を別々につけます。果実は柔らかい刺と毛が密生した細長い卵形です。数個が集まってつき、こんぺい糖のように見えます。本市でも増えつつあります。

■問い合わせ■

文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52-1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.38

前方後円墳は何を語る？

萩野谷　悟　氏
考古部会専門調査員
（市教育委員会文化スポーツ課嘱託職員）

古墳時代を担当する萩野谷悟です。浅学ですが、より良い市史となるよう精一杯頑張りますのでよろしくお願いします。

さて、今年7月、古墳関係で大きなニュースがありました。ユネスコ（国連教育科学文化機関）の世界文化遺産に日本の古墳群が登録されたのです。登録されたのは、大阪府にある「百舌鳥・古市古墳群」です。最大の前方後円墳「仁徳天皇陵古墳」（大山古墳または大仙古墳、墳丘長486ｍ）や2番目に大きい「応神天皇陵古墳」（誉田御廟山古墳、同425ｍ）など古墳49基が構成資産とされました。これらの古墳は4世紀後半から5世紀後半ごろに築造されたもので、堺市（百舌鳥エリア）と羽曳野・藤井寺両市（古市エリア）に密集しています。各古墳の被葬者が学術的に確定できているわけではありませんので特定の天皇名などを古墳名称とすることには問題がありますが、ともかく日本における国家形成期の社会の在り方を目に見える形で表しているモニュメントであることは間違いありません。

これらの構成資産の中には前方後円墳が多く含まれています。大規模な前方後円墳を築造するには、大きな権力もさることながら、当時としては高い技術力が必要だったと思われます。前方後円墳は、平面形が鍵穴のような形をした古墳です。円形や方形と違い、前方後円形というのはかなり複雑です。この複雑な前方後円形を大規模に、しかも整然と地上に構築するには精密な設計図や高い技術力が必要で、実際それらが存在したと思われます。前方後円墳は九州から東北地方まで分布していますが、このように広く分布しているのは、各地域の有力者が中央政権との関係を持つ中で築造が許され、必要な情報が与えられたからだと考えられています。

常陸大宮市内にも、それほど大きくはありませんが、前方後円墳が存在します。五所皇神社古墳（下村田、墳丘長約60ｍ）、糠塚古墳（小祝、推定墳丘長90ｍ）などです。県立大宮工業高校（当時）建設に伴い調査され、人物埴輪などが出土した一騎山古墳群４号墳（下村田）も、墳丘長24ｍの小規模な前方後円墳でした。

▲五所皇神社古墳（南から）

市内の前方後円墳はどのような政治状況、あるいは社会構造の中で築造されたのでしょうか。市史編さんの中で、どれだけ実像に迫れるか心もとないですが、具体的な存在の様子などをきちんと把握したうえで考えてみたいと思います。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ　☎52-1111（内線344）

常陸大宮市史編さんだより　Vol.39

秋田藩の修史事業

森木　悠介　氏
古代・中世史部会専門調査員
東海村立図書館非常勤司書（嘱託）

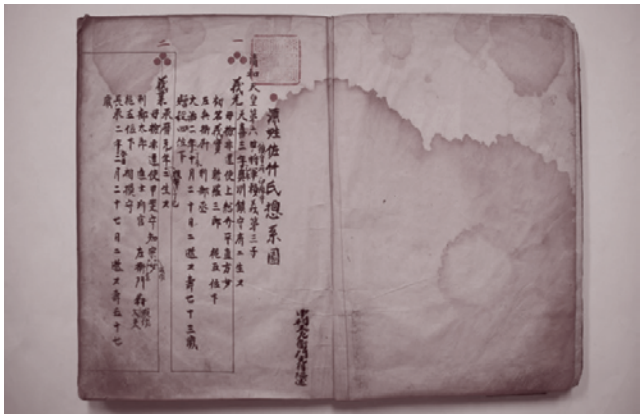
佐竹氏は、12世紀中ごろに源義光の孫、昌義が常陸国に土着して以来、500年近く常陸国北部を根拠地とし、義宣の時代には常陸国ほぼ一国を支配する大々名となりました。しかし、関ヶ原合戦での不手際から、慶長7年（1602）に出羽国秋田（秋田県）へ移されました。

その後、江戸時代半ばになると、政治的にも経済的にも安定し、過去を振り返る余裕が出てきました。そこで秋田藩三代藩主義処（よしずみ）のもとで源義光以来の佐竹氏の歴史を調査・研究する修史事業が始まりました。この修史事業には佐竹氏と藩士との関係（由緒）を再確認する意味合いもありました。修史事業は新たに設置された「御文書所」が中心となり、藩士に伝来文書や系図などを提出させたり、旧領常陸国に藩士を派遣して、秋田へ同行せず帰農した旧臣の家を訪ねたり、旧跡の調査を実施しました（「常陸御用日記」）。

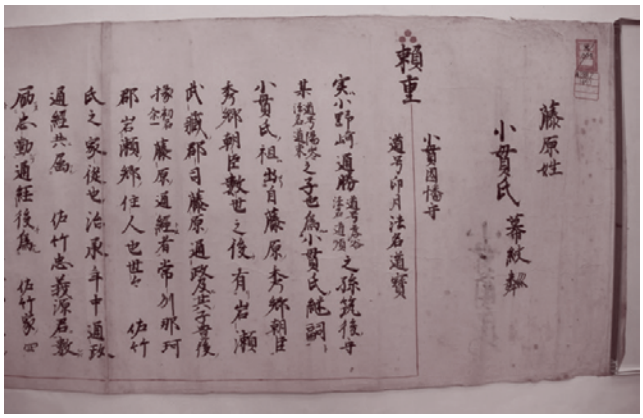
そうした成果をもとに藩士の伝来文書を書き写した「家蔵文書」、藩主家所蔵文書を中心とした「御文書」、佐竹一族の系図集「源姓佐竹氏総系図」、中級藩士の系図集「諸士系図」などといった史料集が編纂されていきました。これらは家譜編さんのための副次的な産物ですが、今日でも佐竹氏研究に欠かせない史料群です。修史事業は30年以上に及び、享保12年（1727）に二代藩主義隆までの家譜が完成しました。

さて、古代・中世史部会では2022年度の資料編刊行に向けて準備を進めており、古文書以外にも系図・系譜を収録する予定です。現在、秋田藩が修史事業で収集あるいは編さんした史料群の大部分は秋田県公文書館が所蔵しています。その成果を資料編に取り入れるべく、調査員が分担して秋田県公文書館に赴き、系図・系譜の調査を行っているところです。

宇留野、大沢、小瀬、小田野、小場、高部、長倉、野口、檜沢（以上佐竹一族）、石沢、泉、小貫、小祝、野上氏ら常陸大宮市内の地名を名字に持つ氏族はもちろん、佐竹本宗家を始め、常陸大宮市域と関わりが深い氏族もできる限り収録していく予定です。しかし、秋田藩の修史事業の成果だけでは十分とは言えません。秋田転封の際、帰農して常陸国に残った者や水戸藩など他家に仕えた者も多く、そうした家の調査も進めております。そのため、系図などの史料をお持ちの方はぜひ事務局までご一報ください。



▲源姓佐竹氏総系図（秋田県公文書館蔵）



▲小貫氏系図（秋田県公文書館蔵）

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52-1111（内線344）

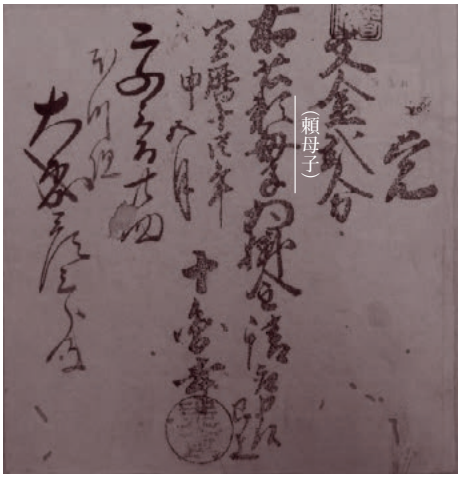
常陸大宮市史編さんだより　Vol.40

村人の暮らしと寺社

川上　真理　氏
近世史部会協力員　筑波大学研究員

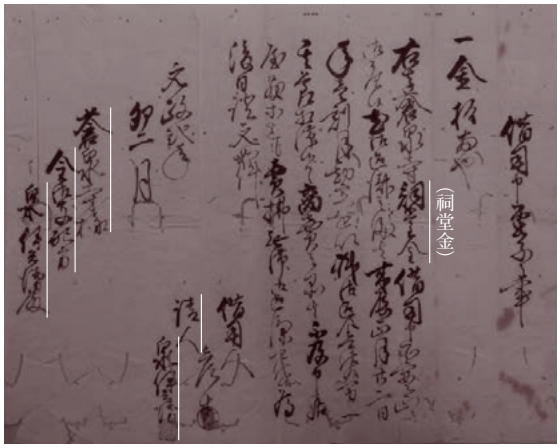
江戸時代の水戸藩領では、村ごとに鎮守が一つ置かれていました。一般的に村の鎮守では、新年には豊作を祈り、秋には収穫を感謝し、日照りの夏には雨乞いをし、時には村人の願掛けのため太々神楽（だいだいかぐら）が奉納されたりしました。一方で寺院は、個人が寺の檀家であり禁止宗教の信者ではないことを保証する、江戸幕府の重要政策（寺請制度（てらうけせいど））の担い手として存在しました。水戸藩では、寺院がみだりに儲けたり人々を惑わせたりしないよう厳しく統制していましたが、実のところ、村人との関係はどうだったのでしょう。

これは、宝暦14年（1764）5月に十円寺から長倉村本町組の大森彦三郎に宛てた文書で、頼母子（たのもし）の掛け金として文金2分（小判の半分の価値）を受け取ったと記してあります。頼母子とは、発起人と仲間とが所定の金品を出し合って、抽選等の方法により仲間の一人に金品を融通し、全員が取得するまで続ける互助的金融です。この場合、十円寺が発起人で、大森彦三郎には「二千三百廿四」の番号が付されています。受取証は前半部が木版刷りで後半部が直筆ですから、十円寺では受取証を予め複数枚用意しておき、発行の手間を省いていたわけです。大規模な頼母子講を組織していたのかもしれません。



▲頼母子掛金受取之事（大森智家文書1009、茨城県立歴史館寄託）長倉村の庄屋を務め、江戸時代後期には紙問屋を営んだ大森家に伝わった文書群

次は、文政2年（1819）2月、大森彦重が蒼泉寺から金10両を借用した文書です。これは、蒼泉寺の祠堂金（しどうきん）から借りたもので、翌年1月22日までに年利1割の月賦で返金する約束です。遅れたならば、商売の品ばかりか家屋敷も売り払って返済するともあります。祠堂金とは先祖供養のために寺に納めた金銭で、寺ではこれを貸付に利用していました。面白いのは、請人（保証人）である泉伊兵衛が、「蒼泉寺様　金御支配方泉伊兵衛殿」と蒼泉寺の役人でもある点です。現代ならば、利益相反と言われそうです。



▲借用申金子之事
（大森智家文書 709、茨城県立歴史館寄託）

近世編では文化に関して調べています。文化とは、名だたる文芸作品や際だった技芸のことだけではありません。郷土で培われた生活の様式そのものが文化です。そうした視点から、常陸大宮市域の豊かな文化を記述できればよいと考えています。

■問い合わせ■
文化スポーツ課
文化・スポーツグループ　☎52-1111（内線344）